



細菌性赤痢について

○細菌性赤痢とは

「赤痢 (dysentery)」は、発熱と下痢を主徴とした感染症です。「赤痢」は 2 種類の異なる病原体による感染症 (細菌性赤痢とアメーバ赤痢) を含みます。今回は一般的に赤痢を意味する細菌性赤痢について詳しく解説します。赤痢は「過去の病気」のイメージが強いですが、現代社会においては、異なる意味合いで注意が必要な感染症となります。

一つ目は輸入感染症です。海外に渡航した日本人、来日した外国人が国外で感染した後に入国した事例を指します。現在では発生数の 3 分の 2 近くを占め、病原性の強い菌種も持ち込まれる可能性が有るので、特に注意が必要です。

二つ目は食中毒です。過去には輸入冷凍カキが原因とされる大規模な散発的な集団発生 (diffuse outbreak) がありました。このほかにも感染した調理 (製造) 従事者が食品を介して感染を広げた食中毒事例もいくつか報告されています。すし、漬物などが原因食品としてあげられる他、県内でも調理パンを原因とする集団食中毒が発生しています。

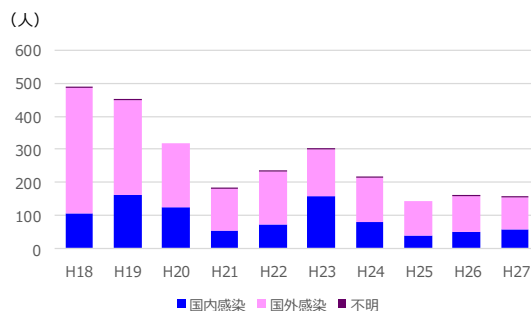
三つ目は幼児の集団感染です。ここ数年の間にも保育園や幼稚園での集団発生が大阪、北九州で報告されています。症状が比較的軽い場合は見逃されがちで、おもちゃの共有や夏場のプールで感染が拡散します。

○赤痢菌

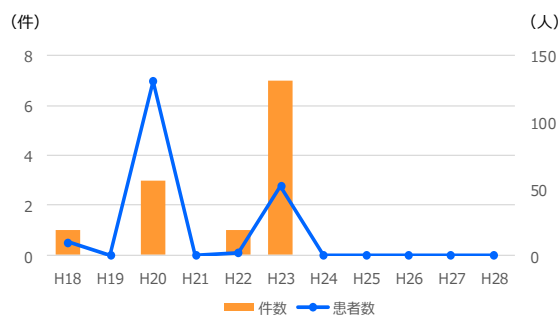
細菌性赤痢は赤痢菌 (*Shigella* 属) により引き起こされます。故志賀潔博士により発見されたことから、菌名も博士の名前 (Shiga) に由来しています。赤痢菌の中には志賀毒素 (Shiga toxin; Stx) を産生するものがあり、食中毒でも頻繁に取り上げられる「O157」など腸管出血性大腸菌 (EHEC) の主要な病因であるベロ毒素 (Vero toxin; VT) と同じものです。一方で毒素を産生せず、病原性も弱い菌種もあり、現在では日本を含めた先進国のほとんどでこの菌種が優勢となっています。

○感染と症状

赤痢菌の感染源はヒトです。食品や飲み水、手指、ハエ、調理器具などを介して口から体内に菌が取り込まれることによって感染が広がります。腸内に達した菌は、大腸の粘膜細胞を次々と破壊するため血性の下痢 (血便) となります。通常、感染から 1~3 日で発症し、典型例では全身の倦怠感、悪寒を伴う急激な発熱、下痢を呈します。さらにしづり腹 (強烈な便意はあるが便はでない)



赤痢感染者感染地別報告数 (全国)



細菌性赤痢による食中毒報告数 (全国)

や腹痛、膿粘血便を伴います。症状は通常、4～7日間続きます。この特徴から古名では血屎（チクソ）、疫痢とも呼ばれ、特に小児では死の病のイメージが強かったようです。

患者の便には1gあたり100万個から1億個の赤痢菌が含まれていますが、10～100個程度の菌があれば感染が成立するとされています。このため汚れたおむつや下着、トイレを介して、家庭内の二次感染が高率に起こります。

ただ、ヒトが感染源のため上下水道など社会基盤の整備に伴い、汚れた井戸水等従来の原因は取り除かれ、先進国では報告数が激減しています。日本でも戦後の衛生状態が悪い時代には年間2万人近くの死者を数えましたが、1970年頃から顕著に減少し、その後も減少傾向が続いています。県内の発生状況もきわめて少なく、発生件数が0の年も有ります。

豆知識 俳句の季語となった感染症

太陽暦7月（旧暦6月）；晩夏の項に

コレラ、マラリア、**赤痢**、水あたり

などこの時期の水系感染症の多さを実感させる言葉が並んでいます。

ちなみに冬の「インフルエンザ」は俳句には長すぎるので「流感」等に置き換えられます。

おもかげのなほうるはしき赤痢かな

日野 草城

○赤痢の予防と対処

赤痢の予防には他の感染症と同様に手洗いが基本です。用便後やおむつの処理後には、手指用の消毒薬を使いましょう。下痢等の症状が有る場合には、調理作業やプールは止めましょう。海外旅行先では生水や生もの、氷はさけるようにします。

県では細菌性赤痢が発生した場合、患者の渡航歴や飲食歴等、過去の行動を調査し、原因の把握に努めます。また患者の周囲の方の検便を実施し、感染範囲を特定するとともに感染の拡大を防ぎます。国の機関とも協力し、菌の特徴を遺伝子レベルで検査し、感染経路の究明を行います。

トピックス ～夏休み科学の体験広場～

平成29年7月28日（金）に保健環境研究所前のホールで「夏休み科学の体験広場」を開催しました。小学4～6年生33名の参加があり、「身近な細菌を観察してみよう」、「食品の色を利用して染物に挑戦しよう」、「環境にやさしい自然エネルギーを学ぼう」、「食品中の色素を分離しよう」の4つのテーマに分かれて様々な科学体験をしていただきました。



ぎふ保環研だより

編集・発行
岐阜県保健環境研究所

平成29年11月発行

〒504-0838 各務原市那加不動丘1-1
TEL 058-380-2100 FAX 058-371-5016
E-mail: c22614@pref.gifu.lg.jp
URL: <http://www.health.rd.pref.gifu.lg.jp/>

